

行雲流水

No. 4 7 令和3年5月28日発行

映画のススメ

校長 寒河江 正人

先日、知り合いから「**どら焼き**」をいただいた。

「**んまいなあ。**」と「**どら焼き**」を食べながら、「**ある映画**」のことを思い出していた。

「**映画**」を通して、私たちが「**人としての生き方**」を考えさせられることは、多いものだ。

今は亡き、**樹木希林さん**の、最後の主演作品となった「**あん**」という映画です。

原作：ドリアン助川、監督：河瀬直美、**6年前の5月30日に公開**された作品。

「**おおよそのストーリー**」は、こうでした。

過去に過ちを犯し、断れない訳があって、流行らないどら焼き屋「**どら春**」の雇われ店長として、単調な日々をこなすだけの**千太郎**（永瀬正敏）。

その店の常連である中学生の**ワカナ**（内田伽羅）。

ある日のこと、その店の求人募集の貼り紙を見て、「**給料は要らないから働かせて欲しい**」と、一人の老女、**徳江**（樹木希林）が懇願してくる。

最初は取り合わない**千太郎**だったが、**徳江**が持参した「**あん**」を期待せずに一口含んで、これまで味わったものと全く違う**極上の味、あまりの美味しさ、非凡な腕前**を悟り、驚く。

千太郎は、**徳江**に「**あん**」作りを任せ、仕事にも精を出すようになる。

みるみるうちに店は**大繁盛**。**3人**の間に「**笑顔**」が広がる。

だが、それも一時。**徳江**が手の指が曲がった「**ハンセン病患者**だ。」と噂が広まってしまい、繁盛は止まってしまう。**徳江**は、すでに、40年も前に**完治している**というのに・・・。

「**心ない人の噂**」は、彼らの「**運命**」を変えてしまう・・・。

徳江は、寂しい笑みを浮かべながら、自ら静かに身を引き、去っていく。

去り際に浮かべた寂しい笑みの向こうに、「**こちらに非はないつもりで生きていても、世間の無理解に押しつぶされてしまうことがあります。**」「**私たちも陽のあたる社会で生きたい。**」と、**徳江**が静かにつぶやいたその声が心にしみる。

2年前の7月24日、国に損害賠償を命じた熊本地裁判決の確定を受け、当時の安部晋三首相がハンセン病家族訴訟の原告団と官邸で面会し、「**みなさまが強いられた苦難と苦痛に対し、首相として政府を代表して心から深くおわび申し上げます。**」と直接謝罪した。